

仙台教区 復興支援活動ニュースレター

4→6・45通信

発行人：平賀徹夫 編集：小松史朗
 〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
 カトリック仙台司教区事務局
 TEL 022-222-7371 FAX 022-222-7378
 義援金振替口座：02260-9-2305
 名義：カトリック仙台司教区本部事務局

被災地もすっかり秋らしくなり、各地で紅葉狩りやいも煮会など、イベント開催の話題を聞くようになりました。今回は、亶理町で活動されている、さいたま教区栃木地区「いちごの絆の会」の活動と、「八木山オリーブの会」のいも煮会の様子をご紹介します。

8月・9月 亶理仮設住宅での支援活動

カトリック鳥山教会

藤田 恵神父

いちごの絆の会は、8月・9月に次の3つの活動を行いました。

①8月22日（金）仮設住宅2箇所での陶芸教室を開催

午前「公共ゾーン第3仮設住宅」参加者：21人参加（内、男性1人、子供4人）

午後「館南仮設住宅」参加者：女性16人



陶芸教室（小皿と陶板の作成）は、陶芸家・向山文也さんのご協力のもと、向山文也さんご家族3名と藤田神父の4人で活動を行いました。

昨年大いに好評だった陶芸教室を、住民同士の繋がりが薄く、参加者が少ないと言われる公共ゾーン（以下公共）第3をあえて選んで行いました。公共第3は、ペット同伴が認められた仮設のため、できるだけ同じ地域の人々が住む他の仮設と違い、様々な被災地域の方が生活しています。そのため企画に人が集まりづらいと事前に説明を受けていました。そのため、陶芸教室のチラシを事前に郵送して公共第3の全戸に配っていただき、近隣の公共第1と第2の集会室には、各々ポスター2枚とチラシ20枚を届けました。

陶芸教室とちょうど同時時間帯に公共第2で「健康体操教室」が開かれるということで、そちらに参加される方が多く、陶芸教室への参加者は、定員30名に対し21名でした。前回ほど参加者は多くありませんでしたが、公共第1、第2から参加して下さる方や、健康体操が終わってから参加して下さった方が3名もいたことなど、人が集まりづらい仮設の割には人が多く集まり、とても嬉しく思いました。そして陶芸教室が人気であることを改めて感じました。

今回、唯一の男性参加者は、健康体操教室を終えてからの参加でした。時間が少なかったため、自宅に粘土を持ち帰り、家の道具を使って陶板にしたものを、わざわざ午後の館南の集会室に届けてくれました。

男性のとても嬉しそうだった様子や、公共第3の参加者の女性が帰り際、向山さん母・娘の手を握って「出来上がってくるのをとても楽しみにしています」と大変喜んで感謝していたことが印象的でした。

今回残念だったことは、被災者ではない方がコミュニティーラジオで陶芸教室があることを聞き、参加したいと来られたのですが、以前に被災者でない町民がなぜ仮設の企画に来ているの？とトラブルがあったため、職員の方が参加をお断りしたことです。被災者とそうでない人の間に溝があり、そこを埋める企画がこれから必要かもしれない、被災者もそうでない方も、同じ町民として一緒にできる企画が必要と感じました。

また、作業後にすぐお帰りになる方がいて、ゆっくりお話をすることができない面もあったため、作業後に品評会のようにしてお互いにしゃべる時間をつくる必要性を感じました。

②8月26日(火)午後 「旧館仮設住宅」にて映画上映会

参加者：22人参加(うち、男性5人、小学生3人)

上映内容：「男はつらいよ 寅次郎春の夢」



那須教会の信徒4人と峰教会の信徒1人(運転手)の計5人での活動となりました。

旧館仮設住宅での上映会は、2年前の4月に初めて行い、その後ずっと行っていませんでしたが、今年3月に2回目の開催となりました。3回目となった今回、上映時間は1時間半ほどで、その後1時間ほどお茶を飲みながら参加者の方々とおしゃべりをしました。見にこられる方は大体固定してきていましたが、上映中には笑いが聞かれ、皆さんはとても楽しみにしているのを感じました。

今回よかったことは、集会所の臨時職員の方に、紅茶やコーヒーの提供など積極的にご協力いただき、上映後、スムーズにお茶会をすることが出来たことです。今後の課題としては、上映のための機材設置にかかる時間が、参加者の方にとっては待ち時間になってしまうので、その時間に電子オルガンなどを持ち込んで童謡や抒情歌などの音楽を楽しめるよう工夫したらよいのではないかと感じました。

③9月15日(月) 場所：仮設住宅2箇所 篠笛とカフオンの演奏

午前「公共ゾーン第2仮設住宅」 参加者：16人(うち、男性3人)

午後「中央工業団地仮設住宅」 参加者：21人(うち、男性1人)

今回の演奏会の参加者は、中嶋竜一さん(篠笛)、栃木ダルク那須TC職員の木川さん(カフォン)、岡村さん(音響)、藤田神父の4人で行いました。

信徒ではない方によるボランティアでの演奏会でしたが、演奏するメンバーを中嶋さんがプロデュースしてくださり、プロの方がミキサーなどを使って音響を操作し、音質がとてもよく、聞く側にとっては非常に完成度の高い演奏会になりました。

木川さんには、南米の港でスケソウダラを入れる木箱を叩いているうちに楽器になった「カフォン」を演奏していただきました。練習は直前の1日だけで、往路の車の中で曲の打ち合わせをしましたが、笛と打楽器の組み合わせで表現豊かな演奏会になりました。



公共ゾーンの方で、震災で心を患った方が、演奏会後に一生懸命に木川さんと話されていたのが印象的でした。震災の辛い過去をお話されたそうですが、以前からお見かけしたことはありましたが、話している姿を見たのは今回が初めてだったので、段々と話せるようになってきたのだなと感じました。こういった方が復興住宅に引っ越しした後、どうなるのか大変気になりました。

また、お茶の時間に被災者とお話した際、被災者同士の会話の中にもちょっとした一言で心が傷つくことがあると話された方がいました。「外部」のわたしたちが入ることで、逆にほっとする面があるようにも感じました。

公共ゾーンでの演奏中、現在は新居に移ったが公共ゾーン第1仮設で生活していた被災者の方が、ポスターを見て興味をもたれ、演奏を聴きに來てくださった。横笛を吹いているので、篠笛に興味をもったそうです。その後、平成7年ごろに巨理町が作った藩主・伊達成実を称える「成実囃子」を演奏しようという話になり、午後の中央工業団地での演奏会にて、即興で演奏していただきました。地元のお囃子ということで、会場のお年寄りは大いに盛り上がりました。



演奏会后、今回活動に参加していただいた方を山元町の被災した駅と小学校に案内した。被災地での演奏は初めてではなかったが、その被害の大きさに驚いていました。帰りの車では「今回は内容の濃い演奏会だった」と語ってくださり、案内した側としても大変満足でした。

今回は、カトリックとかかわりがある方がたまたまコンビを組み、一緒に音楽で被災者の方に楽しんでもらうというスタイルになりましたが、宣教的な観点からも大変よかったと思います。

今年は早めの「いも煮会」～巨理旧館仮設住宅で～

八木山オリーブの会 野田 和雄

カトリック八木山教会信徒による「八木山オリーブの会」主催の「いも煮会」が、10月8日、巨理町の旧館仮設住宅集会所で開かれました。

「いも煮会」は昨年も行い、大変評判がよかったイベントですが、今年は少し早めの開催となりました。それは、町内に復興支援住宅が完成し、転出者が増えたためです。実際、入居数は当初の92世帯から55世帯に半減しました。月平均6～7世帯の人々が、仮設住宅から復興支援住宅へと引っ越しており、来年4月には、旧館仮設住宅が閉鎖される予定となっています。

準備を進めていたオリーブの会では、当日の雨を心配し、「午前中だけでも、晴れてくれたら」と言っていたのですが、当日は「雲一つない秋晴れ」という表現がピッタリのすばらしい天気にも恵まれました。

旧館仮設住宅でのオリーブの会の活動は、当初、八木山教会の信徒だけで行っていましたが、亘理教会の信徒も加わってくださり、今では合計38人がこの活動を支えています。その他、人材面・資金面でも、田園調布教会や五井教会など、多くの教会が支えてくださっています。

午前9時、八木山教会、亘理教会のボランティアたちが、かいがいしくいも煮の準備を始めました。いも煮は、宮城風と山形風がありますが、今年は純宮城風のみも煮でした。味噌仕立てで豚肉を使うものです。そうそう、いも煮に使う芋は、里芋と決まっています。他の野菜類は、ボランティアさん各自が分担して、切ったものを持ち寄る方式で行いました。里芋、大根、ゴボウ、白菜、ねぎ、肉などの食材を大鍋に入れ、ぐつぐつ煮こみました。

一方、旧館仮設住宅の被災者の方々も、「いも煮はオリーブさんにおまかせするけど、おにぎりはまかせといて」とこれも朝からご飯を炊いて、集会室で次々におにぎりを作ってくださいました。おにぎりを握りながらも、いも煮の具合にも心を配り、声をかけ合っています。

予定どおり、12時にはすべて準備完了。みんなでお椀に入りたいも煮とおにぎりを食べ始めました。おしゃべりに花が咲き、それはそれはにぎやかな食事会です。

食事も終わりに近づいたころ、亘理教会の担当司祭ホセ・ゴンザレス神父に仮設住宅の人々から、歌の要望。人気者のホセ神父が歌うスペイン語の歌に皆、大喜びでした。



最後に、最近、同仮設から復興住宅等に移った4人に、「旧館仮設住宅 卒業記念」のアルバムが贈られました。同会が、集会所での集いやお花見遠足などで撮りためた写真は、約3万枚。アルバムはその中から一人一人にとっての思い出の場面を探し、オリーブの会のボランティアさんがその時の思い出をメッセージに託した言葉とともに張り込んだ一点もの。4人は、「まだ卒業していない人たちもいるから」と、そっと手渡された色紙をうれしそうに眺めていた。

「それでは、また!」。これが、オリーブの会と旧館仮設の人々の別れのあいさつです。この日も、いつものように元気なあいさつで終わりました。